

主 要 記 事

本学の歩んだ途（その1）	
名誉教授を囲んで座談会	1
理学部長に就任して	4
新入生セミナー報告	5
大学院総合理工学研究科の専攻 名及び講座名の紹介	7
学内情報	8

本学の歩んだ途

本学創立100周年記念行事

名誉教授を囲んで座談会（その1）

出 席 者

名誉教授 植村 琢
名誉教授 山田良之助
名誉教授 内田 俊一
名誉教授 佐々木重雄
名誉教授 古賀 逸策
名誉教授 森田 清

学 長 川上 正光

（百年史編集委員会委員）

○教 授 小林 靖雄

教 授 栗野 満

教 授 岸 源也

教 授 関根 太郎

教 授 田中 良平

教 授 室田 忠雄

蔵前工業会事務局長

遠藤 彊

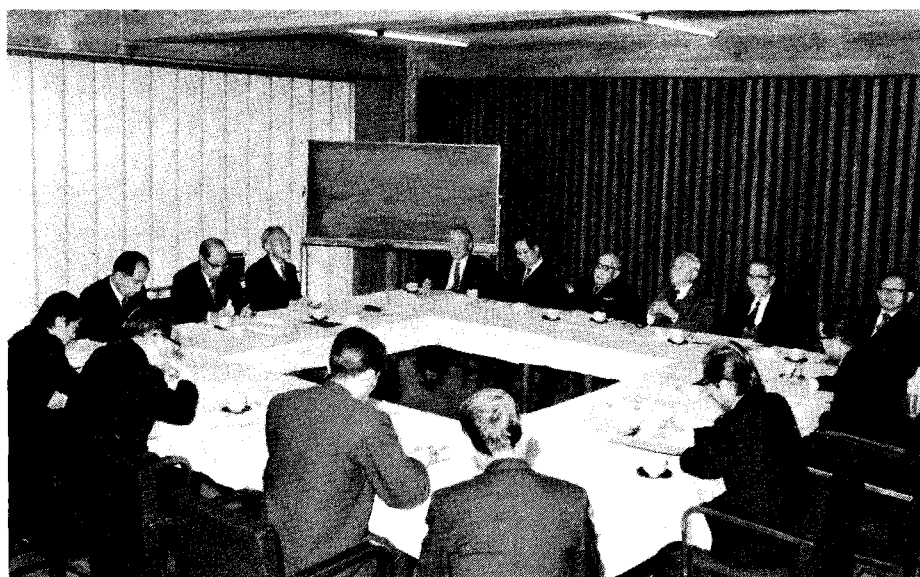
事務局長 齊藤寛治郎

庶務部長 田崎 正

経理部長 木下 四郎

庶務課長 齊藤正太郎

（○印は委員長）



学長 名誉教授の先生方、大変お忙しいところ、お越しいただき、有り難うございます。現在「東京工業大学百年史」の編集が始まっております。この事業については、加藤学長時代から小林教授が委員長となり、今日まで熱心にやっていただいております。

「百年史」を立派なものにするため、小林教授から、我々若い者が名誉教授の先生方に、御在職中のお話をお伺いしようという提案がございました。名誉教授の方が現在89名おられるので、三回程度に別けて座談会を開く予定であります。今日はその第一回目でありますので、よろしくお願いいたします。

小林 お話に入る前に、まず、今までの経過についてご報告します。既にクロニクルその他で「東京工業大学百年史」を編集するということ、先生方のお耳にも入っていると思います。昭和56年が満百年にあたるので、100周年を迎える昭和55年には、種々の記

念事業を行うことが計画されており、百年史もこの一環として考えられ、昨年7月から総勢23名の委員を、各部局を網羅する形でお願いいたしました。更にその中で、実質的な仕事をやっていただくため、本日出席の11名の方に小委員になっていただきました。

この委員会では「百年史」編纂の基本方針を検討決定しました。昭和15年に60周年記念事業として「六十年史」がつくられましたが、これは東京職工学校以来の編年史でありました。今回は全体の通史的歴史、学科・研究所等あるいは関連学校等の部局の歴史、それに、歴史には当然付きものの組織の変遷が一目でわかる資料、年表等をつくりたいと思っております。

さて、昭和15年の「六十年史」を見ますと、昭和12～13年頃までのことが主で、この後の細かいことは載っておりません。今日、名誉教授の先生方に是非お願いしたいと学長にお願いしたのは、昭和4年の大学昇格から、同10年以降の戦時体制下での学科・研究所等の増設充実等、特に戦時中のことは、資料的にあまりがないので、この点を是非お伺いしたいと思っております。最初に、私達が全く存じあげない蔵前時代

の校長で、昭和17年3月まで初代の学長をされた中村幸之助先生はいしは、その頃のことについてお話をお伺いいたします。

古賀 中村先生の事については、森田先生からもお話

 いただけたと思いますが、まず私から当時の話をさせていただきます。私は昭和4年この大岡山の工大が発足した時に、こちらへ勤めるようになりました。当時の電気科の主任教授は、東京帝国大学の

鯨井恒太郎教授で、本学の電気関係の学生の教育方針等は、この鯨井先生のやり方におまかせするということになっていたらしく、この先生の御尽力は大変なもので、先生が東大から工大に転任されたと世間の一部の人は考えていた程でした。

私は鯨井先生のお勧めで、こちらにお世話になったのです。鯨井先生と建築の佐野利器先生のお二人が、個人的にも非常に親しい間柄であったと聞いておりました。大学になった当時に、新たにそういう優れた先生方が招かれ、発足企画に参加されたことは、この工大に最初から良い新風を吹き込んでいただくことに与って、大きな力になったのではないかと感じております。それと全く別の角度から私の印象に残っていますのは、石井茂助事務官の目立った存在です。石井事務官を説得するのは容易じゃないとか、こんなことをされては困ると思っても、強引に押切られてしまうというようなことを、当時の先生方からよく聞きました。

当時の中村幸之助先生は、いわゆる司令官で、全てのことは石井事務官にまかせきりで、非常に重く用いておられました。そういうことで何も彼もまかせていたことは、いくらかはマイナスになったかもしれないけれども、事務的に非常に優れた才能があった人を上手に活用されたことは、結果的にプラスの面として現われていたといえましょう。それともう一つ、それは漠然と感じている私の印象ですけれども、先程お話しした鯨井先生や佐野先生の新風と中村先生の描いておられた新たな大学のイメージとは、必ずしも一致していなかったように思われます。しかしこれはむしろ、これが渾然一体となって両方の特徴が表われ、割合短期間に、工業大学が非常に大きい存在として世間に認められるようになったと考えられます。

世間ではしばしば、東京帝国大学があるのに、またその他に大学が必要なのかという話が流布されておりました。こんな状態で、入学志願する人達もまた、はじめはあまり認識していなかったと思いますが、たちまちのうちに大きな存在になったことは、特筆すべきことではなかったかと思えます。それには一面は教育について、他は研究の業績ということであったのです。具体的には、例えば鯨井先生のおっしゃることと中村先生のおっしゃることとは、少なくとも表面的には大部角度が違っていたのではないかと感じていました。

鯨井先生からこの大学に勤めてみないかという話がありました時、「工大に勤めたら一生懸命学生の面倒をみることを考えて、自分の研究に余計な時間を費すことを捨ててしまう位に、熱心にやらなければいけない。」と強く念をおされたのですが、工大に参りまして、中村学長にお目にかかった時、一番最初の質問は「君はこの大学でどんなことをやるつもりですか」と聞かれ、私は「一生懸命学生の面倒をみることに専念するつもりです。」と申しましたら「そんなつもりで君に来てもらうことは、全然考えてもいなかった。それは困る。」と言われまして、「オヤオヤ」という感じがしたことさえありましたが、年数がたってみますと、そういう両面があったからこそ、うまくいったのではないだろうか。ある意味では、このお二人が、かなり違っていたのにも拘らず、それがうまく調和された結果、全学がうまくいったというように感じております。

小林 鯨井先生は、本学には直接来られたのでしょうか。

古賀 本学に兼任で来られました。事実上、半分は工大におられ、現にこちらで、ご自分で実験などもやっておられました。あの熱意はたいしたものだと思っております。

小林 どうもありがとうございました。森田先生、古賀先生に加えて……。

森田 「百年史」といっても堅い歴史上のことではなく、エピソード的なものを思い出すまゝに述べます。



中村先生という方は漢学の素養があった方で、講義は電気機械でしたが、講義をわからせるために、講義の最中にいろいろな話をされました。例えばインダクションモーターの話の時に、鳩翁道話の松山鏡を話しました。松山鏡は有名な話で、柴田鳩翁は江戸時代の後期、京都・大阪にいた石門心学者ですが、非常に話が面白いので、技術的な内容よりも鳩翁道話の話の方をいつまでも覚えております。

先生自身は Arnold E. と J. L. la Cour の共著の Die Gleichstrommaschine という教科書を種本に講義をしていたのですが、黒板に非常にきれいなドイツ文字を書かれたのを覚えております。先生は講義に大変夢中になっておられて、わからないところがあって、講義の途中で手を挙げ「わかりません」なんていうと、怒鳴られて「黙っていろ。しまいまで聴けばわかる。途中で質問等するな。」と言われました。講義はしまいまで流れるようで、先生はまるで千両役者のようでした。

先生は、本というものをお書きになりませんでした。又、推せん博士の最後でもありました。あの頃は博士論文を出して、初めて博士号を貰うということでしたが、同時に業績が学問的に優れていると、推せんされ

て博士になるというのがありました。中村先生が著書、論文をお書きにならないので、この制度による最後の推せん博士になられた次第です。

先生のいろいろな印象の一つとして、「小成に安んずるな」ということをよくいわれました。又、何かの機会にどうして本をお書きにならないかを聞きましたら、「著書というのには、誤りがおこり易く、どうしても嘘の部分があるので書かないことにしている。」と言われたのを今でも覚えております。大変面白い面もあった方でした。

最後に定年制の問題がありまして、中村先生がその頃、年輩の先生方がおられて、定年制を設けるのに非常に苦労されました。ご自分で「俺も辞めるから、お前も辞めろ。」と言って、幾人かの先生を道連れにして辞められたのです。

小林 古賀先生、森田先生お二人と直接関係のあった中村学長についてのお話、有り難うございました。今日ご出席の先生方も、中村先生のいろいろな面をご存知だと思いますが、中村先生のことを書いたものは何かございますでしょうか。電気の先生に伺ったのですが、よく知らないとのことですが。

森田 山本(勇)先生の時には、先生の追悼文集として「薫風」が出されました。本当は中村先生のことを、山本先生なり和田先生なりがお書きになってもよかったのではないのでしょうか。私は非常に残念に思っています。

佐々木 戦争でそういうことをやっている余裕がなかったのではないのでしょうか。中村先生が亡くなられたのは、先生の御子息が、南方へ向う際、乗船が撃沈されて亡くなられるという事故があつて、その後間もなくでした。

森田 あれは昭和20年の1月10日頃でしたでしょうか。

佐々木 中村先生が亡くなられた頃に、私は向岳寮の雑誌に、先生のことをちょっと書いておきました。それを調べてみれば時期がわかるはずです。中村先生のこと、先程森田先生が言われた定年制について、これを教授会で申し合わせする前に、あの時、確か70才以上の方に先生が直接話をされて、自分も辞めるということで了解を得られて、それから教授会に諮られたと聞いております。

さて、私が工大に勤めるようになった頃のことをお話いたします。昭和5年に第二回世界動力会議、第二回国際応用物理学会がストックホルムであり、斯波先生に「いっしょに来ないか」と言われ、私の籍を置く、東大の造兵学科では「行ったら籍が無くなる」と言われましたが、敢えて行くことにしました。

昭和4年世界的な経済恐慌が起り、各国とも工業のことを考え直しており、日本でも臨時産業合理局ができました。斯波先生から、日本では工業標準(当時はJESといった)を沢山作って来たのですが、ちっとも効果が上っていない。ドイツでは非常に効果を上げているが、日本と違っているところを調べて欲しいと

いう依頼があり、それが向うでの研究題目になりました。斯波先生は「そういう仕事をするなら、どこかの大学へ籍を置かなくてはいけない。」と言われましたが、私の東大での籍は、前述のようなわけでストックホルムへ行ったものですから、無くなっていました。私自身は仕事を始めるつもりでいた折、学会の終り頃に、斯波先生から「君は工業大学へ行って欲しい」と殆んど命令に近いお話がありました。この話を承諾すると同時に、関口八重吉先生から「いつ日本に帰って来るのか、出来るだけ早く帰国するように。」と連絡がありました。海老原敬吉先生が4月にドイツに出発することになって、その後の講義を、私が受け持つことに決まっていたようです。帰国したのは、昭和7年3月10日、上海事変が始まって間もない頃でした。早速、中村学長と関口先生にお会いしましたら、学長から「あなたの任命はいつ出るんですか。」と言われたんです。私はなにげなしに「東大の慣習では、教授会で決まったら、大体二週間程度で辞令をいただいたような気がします。」と言ったら、「教授会で任命を決めるなんて、もってのほかだ。」というお話があったので、これはえらい所に勤めたなあという気がしました。その後いろいろ教授会の話も聞いて、なかなか大変だなと思ったのですが、まず第一に、中村学長は教授会に議題を出して、それが自分と同じ結論が出るまでは、議決しないというお話を聞きました。非常に気骨がありますけれども、又一面ちょっと茶目っ気もあって、なかなか魅力ある学長だと私は思っていました。自動車で学校へ来られる時、後の座席に浅く腰をかけられて正座の姿勢でおられました。体つきは痩せていて、顔の感じは翁の面を細く痩せさせたような感じで、非常に風格のある方だったように思います。

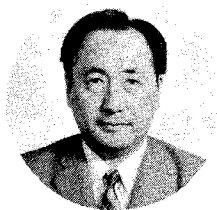
私に「何をやっているのですか。」と聞かれたので、「歯車のことをやっています。」と言ったら、「歯車なんてバビロンの時代からあるものを、まだ研究することがあるんですか。」と言われたので、「ところがあるんです。」と言ったら「万年筆の中にあるエネルギーがどの位あるか知っていますか。」というんです。アトミック・エネルギーのことですね。「それで地球を3・4回廻れるようなそういう研究をやらなくてはいけない。」という話があり、印象深く覚えております。

石井事務官については、我々の間では「石井学長に中村事務官」と言っていました。何か言いに行きますと、中村学長に蹴られるのです。工大に来て間もなく、予算等のことで交渉するのに、一度で引込んではいけないと注意されました。一度蹴られると、その間に事務官は予算的に可能であるか検討される。とにかく事務官の了解を得なければ、何も通らなかったのです。私は大変立派な尊敬すべき学長だったと思っております。

この記事は、百年史編集委員会資料より収録いたしました。

(広報委員会)





理学部長に就任して

理学部長 田中郁三

桜の満開の日に学部、大学院の入学式が挙行された。ここの桜も東京の名所の一つになっていると聞いているが、本当に快晴の澄みきった青空に桜の花がよく調和して美しい。大岡山にこれだけの桜を植え育てた諸先輩の先見の明と努力に感謝したい。今年の夏からは、すずかけ地区に大学院研究科、研究所、研究施設が新しい構想のもとで立派なキャンパスを創造していく苦心がはじまる。すずかけの木がプラタナスの日本名で、プラトンやその弟子たちの学園において涼しい木かげをつくった木であることを知ったのも最近のことである。すずかけ地区にはすずかけの木、桜、いちょうなどを植えていただき、建物ばかりでなく大岡山地区より更にきれいな学園をつくっていただきたいと強く希望している。

この4月1日から岡田利弘先生の後をうけて理学部長に就任することになった。理工学部が理学部と工学部へ分離してもう8年近く経過し、その間いろいろの困難な問題がおこったが、諸先輩たちのご努力によって理学部の評価は対外的にも定着したように思われる。それにつけても感ずることは、東工大の歴史において、大学への昇格、戦後の改革、理工学部の分離、総合理

工学研究科の創設等、その時代時代の社会情勢や教育理念に影響されながら幾多の独自の構想の実施、あるいは先駆的な役割を果たし、むしろ逆に改革の先どりによって他の大学の改革構想にいくつかの指針を与えたこと等、私達の先達がよく先をみとおしてきた識見によるものである。

理学部が本学の中での理学部であると同時に十大学の理学部長会議での役割で象徴されるように、日本の中での理学関係の学生の養成、研究の充実などの義務が課せられている。幸い学部、大学院に入学してくる学生の質は高く、教育する側にとっては、うれしいことではあるが、創造性を秘めた、豊かな人間性を持つ、人物養成という困難な問題に対して、今後力をあわせてとりくんで行かなければならない。又理学部として生物、地学関係の充実も大きい課題であるし、一般教育関係の問題について工学部とともに、よい方向に解決するように努力する積りである。

ずっと以前に、伝記を書くのに外面的な経歴を中心にしたラカント程つまらないものはないと聞いたことがある。ケーニヒスベルグ大学の職にとどまり、毎日毎日何時から何時まで散歩というように、同じ日課を40年間余も続けたからであろう。しかし、彼の思想の上での発展は、近世哲学史上の貯水池であるとよくいわれるように圧倒的なもので、彼の内面的な足どりを追うのには、何冊書いても書ききれぬものでない。研究人員や設備の充実をはかるのと平行して、本学の理学部のどこかの研究室で画期的な理論や実験が静かにはぐくまれて行くことを強く念願しているものである。

第5類

新入生セミナー引率記

近年にない好天気めぐまれて満開の桜の下に行われた4月7日の入学式に比べ、翌日のオリエンテーションは小雨に煙って陰うつな空模様、桜の花が可哀そうと言う気持よりは、明日のセミナーのバス旅行の天候を気にしつつ事務の諏訪さんとセミナーの用意を整え終わったのが夜の9時。

明くれば4月9日。誰の精進がよかったか、天気は晴れ出し、ほっとする。特に早めに来てもらった学生幹事12名に、用意したOHP、ワイヤレスマイクなどをバスに積み込んでもらい、定刻9時30分、電気の先生方や、教務課、工学部の事務の方々のお見送りをうけて、学生150人、添乗の先生や事務職員10名、総計160名を乗せた4台のバスは大岡山を後にした。

吹く風をなこそと、散る山桜を惜しみつつ、バスは

快適に走って目的地の松崎荘には予定より30分も早く到着。

夕刻から2台のOHPと2本のワイヤレスマイクの「マルチAVシステム」を駆使して、末武教授と内藤助教授のコンビによる総合司会のもとに、夕食を共にした懇親会とセミナーが開催された。

安田教授の歓迎の言葉、日野教授の乾杯。会食に続いて大学歌の練習を行ったが、美声の武者教授の指導よろしきを得て、たった2回の練習で、会場われんばかりの大合唱とまでなった。

バスの中で学生諸君に書いてもらったアンケートを日野教授が整理して紹介。(別紙参照)中には、将来工大の教授になって立派な研究を行い、ノーベル賞をもらうという元気のいい抱負もあった。

しかし質問の項ではやはり学習案内に質疑が集中し、その記述の仕方をもう少しわかりやすくしなければならぬと痛感した。またセミナーに教務課の方の参加の必要性があると思われた。

最後にミニライザを使用してアンケートを実施した。学生の押すスイッチの応答がOHPのステージの上へのせた透明メーターによってスクリーンの上に拡大してうつるので、つられて押したものの中にはいたよう

であるし、少々誤差もあるが、結果は次の通りである。

自分の顔に自信のあるもの	70%
ガールフレンドのいるもの	38%
工大に入って良かったと思う人	80%
これから大いに学びたい	85%
学問も遊びも両方したい	96%
将来はバランスのとれた工学者に	96%
他の類に移りたい	8%
電気関係の勉強を大に行いたい	100%
大学生活をエンジョイしたい	100%
よい友人を持ちたい	100%

9時15分に終了してから各自の部屋に戻って、新しい友人との語らいはつきず、松崎荘の窓のあかりは消灯定刻の10時をすぎてもなかなか消えず、潮さいの浜

辺の波頭をおそくまで照らしていた。

翌10日も快晴に恵まれ、伊豆の南海岸を走るバスの車窓から、遠く駿河湾をへだてて白い雪のペールをいただいた富士山も見え、絶好のバス研修旅行となった。

伊豆半島最南端の石廊崎の燈台を見学、白砂青松の白浜海岸や伊豆高原では桜の花のふりしきる下で古歌にある

惜しまれて散るを桜のほまれかな
を実感として味わった。

小田原で近郊の学生5名を下ろし、全員つつがなく大岡山へ帰り着いたのは、定刻より早い5時15分であった。

(第5類主任、工学部電子物理工学科教授 末武国弘)

昭和50年度新入生セミナー報告

学生相互間、学生と教官との親睦の実をあげて
昭和50年度 新入生セミナー成功裡に終る

昭和50年度の新入生セミナーは、めまぐるしく変わる春の天候に、学生ばかりか引率教官もはらはらしてい

たが、幸に好天にめぐまれて、往復のバス旅行はきわめて快適なものとなり、各類とも別表のようにつつがなく行事を終了した。

学外の宿泊施設を用いて、教官と学生との共同生活を通して、相互の親睦をはかり、大学生活を有効に送るための助言指導を行うというこのセミナーの目的は、ほぼ完全に達成できたといつてよい。

類	方 面	宿 泊 所	参加学生数 (欠席者)	参加教官 (事務)	行事 特別講義など	使用 器 具	所 見
1	箱 根	ホテル 冠峰楼	155 (2)	12 (3)	物理学研究の話 非平衡の力学 離散構造		学生は各先生方の講演を熱心に耳を傾けていて効果があった。セミナー全体を通じて学生相互間、学生と教官間の親睦の実をあげたと思われる。
2	千葉 御宿	メキシコ ホテル	74 (3)	13 (2)	メキシコの話 セラミクス入門	映画 (5本)	学生は先生方の話に終始熱心に耳を傾け、また教官と学生との間の親近感が高まったと思われる。
3	九十九里 浜	九十九里 センター	117 (0)	16 (3)	大学の四季 大学生活	スライド	両日とも天候にめぐまれ、滞りなくのびのびと実施できた。新入生の評判もよいようで、所期の目的は十分達せられた。
4	河口湖	富士スバル ランドロッジ	164 (5)	13 (2)	エネルギー問題 前頭葉を使う話 工学についての 懇談	映 画 スライド	学生は大学で何を学ぶべきかということを考える契機を与えられ、あわせて学生と教官、学生同志の交流の端緒が開かれたと考える。
5	西伊豆	伊豆 まつぎ荘	150 (2)	8 (2)	学習上の注意 大学生活について 学 習 案 内	OHP ミニライザー ワイヤレス アンプ	ほぼ予定通り実施、「学習案内」に関する質問がかなり多く、これに2時間も費やした。欠席者は休学と足部骨折によるもので、参加可能者は全員出席し、評判は大変よく、学生と教官の交流は十分なされ、所期以上の成果が得られた。
6	千葉 飯岡	飯 岡 荘	110 (5)	9 (2)	6 類の考え方と 各学科の類似点 と相異点 A I T の話 カトマンズと ヒマラヤ	映 画 スライド	学生の意欲は一般的に増大し、入学時に、土木、建築、社工の類似点、相似点について正しい認識をもつものが増大しており、本セミナーで一層の効果があったものと考えられる。

(類連絡会議主査 末武国弘)

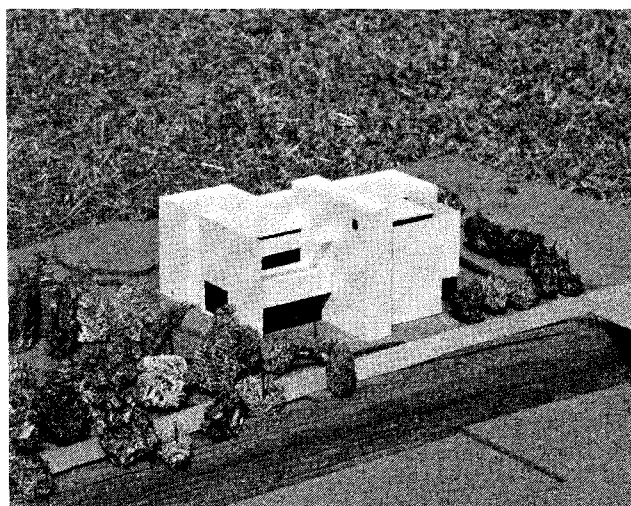
総合研究館大岡山分館の基本計画

かねてから国際研究交流活動の場として、その設置が期待されていた総合研究館大岡山分館の建設計画については、昭和49年3月からその設置方針について、川上学長を中心に、下記のメンバー構成(評議会承認)で、検討が続けられて来た。学内の関係諸委員会とも連絡をとりながら設置場所、建物面積規模、室機能並びに管理運営方法等、基本計画に必要な諸条件の調整を行い、これをもとにこの程、基本設計原案がつくられた。その主な内容は、次のとおりである。

1. 設置場所：大岡山保健管理センター横、緑地帯の一角で、蔵前記念館敷地。
2. 建築延面積：約 700 m²。
3. 構 造：鉄筋コンクリート造2階建。
4. 主要諸室：会議用ロビー、研究会議室、ゲスト用食堂、宿泊関係諸室、事務室(蔵前工業会との連絡等)他。
5. 管理運営方式については、今後、更に検討を行う。
6. 関係省との事務手続が完了後、直ちに実施設計に入り、本年度中に建設を完了する予定。

総合研究館大岡山分館準備会構成員

学 長 川上 正光
 教 授 酒井 善雄(募金会専務理事)
 " 近藤 連一(募金会募金部長)
 " 須藤 六郎(理学部)
 " 桜井 俊男(工学部)
 " 石本 新(")
 " 藤本 盛久(")
 助教授 谷口 汎邦(")
 " 井関 孝善(四研群)
 教 授 岡崎 光雄(教務部長)
 事務局長 斉藤寛治郎



総合研究館大岡山分館模型写真

昭和50年度 学部所属学科発表

今年度の学科所属は、49年度入学者及び48年度以前の入学者で学科未所属者並びに転学科希望者等を対象に、去る3月27・28日の両日に亘り所属学科の志望申告受付を行い、4月8日の理・工学部合同主任会議を経て次のように決定された。

1. 学科所属対象者数及び内訳

入学年度	対象者数	有資格者数	無資格者数	学科所属者数	希望留年者数	備考
49	769	688	81	684	4	
48	80	69	11	69		
47	7	4	3	4		
46	5	2	3	2		
45	4	0	4	0		
転学科	9	9	0	7	2	転学科不可者2名
計	874	772	102	766	6	

2. 学科別所属決定者数

類	学 科 名	定員	修正定員	決定員	所属決定数
1	数 学	20	21	2	22 (1)
	物 理 学	25	26	1	26
	化 学	40	41	4	45 (4)
	応 用 物 理 学	34	36	2	38 (2)
	情 報 科 学	34	36	1	36
2	金 属 工 学	34		1	34
	有機材料工学	20		1	10
	無機材料工学	11		2	11
3		9			9
	化 学 工 学	75		3	75
	高 分 子 工 学	34		2	23
	経 営 工 学	9		3	9
		25			26 (1)
4	機 械 工 学	60		1	60
	生産機械工学	34		3	29 (1)
	機械物理工学	34		2	35 (1)
	制御工学(M)	17		0	17
	制御工学(E)	17			17
5	電気工学課程	129		3	131 (2)
	土 木 工 学	34		3	32 (1)
6	建 築 学	45		0	45
	社 会 工 学	34		2	36 (4)
計		774		36	765 (17)

※所属決定数のうち()内の数字は転入学生を示し内数である。

大学院総合理工学研究科

の専攻名及び講座名の紹介

去る4月1日付けで、既存の大学院理工学研究科とは異なる、大学院総合理工学研究科が設置されました。その組織となる10専攻の名称及び各専攻の編成講座名(基幹講座・協力講座)は下表のとおりです。

なお、大学院総合理工学研究科設置に伴う学部 of 学科からの講座振替え(基幹講座)は次のとおりです。下記以外の各専攻の基幹講座は、工学部共通講座から振替えになりました。

大学院総合理工学研究科 理学部

生命化学専攻

化学科

生物有機化学←化学第三

エネルギー科学専攻 工学部機械物理工学科

核融合工学←流体力学

システム科学専攻 同 制御工学科

システム制御←制御設計学

同 システム・マネジメント←経営工学科

同 システム・マネジメント←経営システム工学

○印 基幹講座、無印 協力講座()内は協力もと。

専攻名	講 座 名	専攻名	講 座 名
物理情報工学	○応用計数学	材料科学	○破壊力学
	○基礎物理情報学		○材料強度
	印 画像工学 (⑩情報記録)		固体構造 (⑨物理・物性物理学第四)
	情報像計測 (⑩像情報解析)		固体反応 (⑪無機焼成材料)
	情報システム (⑩像情報システム)		非晶質体 (⑪無機溶融材料)
	情報処理機構 (⑩電気回路)		結晶化学 (⑪固体物理)
電子化学	演算工学 (⑩電気計測)		相転位 (⑪化学や金)
	○溶液電子化学	電子システム	材料設計 (⑩熱処理工学)
	○電子移動反応		材料計測 (⑪基礎計測)
	○電子反応化学		結晶合成 (⑪合成無機材料)
	○金属電子化学		○電子システム基礎学
	○固体電子化学		○電子デバイス
電子化学	錯体電子化学 (⑩無機資源)	電子システム	回路構成 (⑩超音波工学)
	電子化学工学 (⑪化工・電気化学)		変換工学 (⑩振動工学)
	触媒電子化学 (⑩触媒化学)		制御システム (⑩数値制御)
	有機電子化学 (⑩合成化学)		電子計測 (⑩精密電子要素)
	生物電子化学 (⑩生物資源)		

社会開発工学	○物理環境工学 ○地盤工学 ○地震工学	化学環境工学	化学環境プロセス設計 (⑩生産設備)
	社会開発計画 (⑩社工・地域計画) 地域施設計画 (⑩建築・建築計画第三) 地域環境設備 (⑩土木・都市工学) 防災構造 (⑩建築・建築構造第二)	生命化学	○細胞生理学 ○生物有機化学 生体触媒 (⑩酵素化学) 代謝化学 (⑩有機合成化学) 生体分子構造 (⑩構造化学)
		学	微生物化学 (⑩天然物化学)
精密機械システム	○情報変換学 ○自動設計学	エネルギー科学	○エネルギー基礎学 ○核融合工学 核融合炉工学 (⑩原子炉燃料) プラズマ工学 (⑩電気・電子 電力工学) エネルギー変換物性 (⑩応物・応用分光学) エネルギー物理・化学 (⑩原子炉物理)
	精密機構学 (⑩精密機械要素) 超精密測定学 (⑩機械計測) 精密加工学 (⑩精密工作) 精密伝達工学 (⑩歯車工学) 機械運動制御 (⑩機械回路)		
化学環境工学	○化学生態システム解析	システム科学	○システム理論 ○システム・マネジメント ○システム制御 システム解析 (⑩情科・情報計画) 化学プロセスシステム (⑩化工・化学装置設計) 生産システム (⑩生産・機械設計学)
	○環境化学 化学プロセス計画 (⑩有機資源) 資源循環プロセス (⑩高分子材料) 化学環境設備 (⑩化工設計) 化学環境プロセス管理 (⑩計測制御)		

工業材料研究所の部門名称変更

4月1日付けで、工業材料研究所の二部門の名称が、下記のとおり変更になりました。

(新) 結晶体物性

(旧) 固体物理

(新) 高純度材料

(旧) 化学や金

学年進行に伴う講座新設

工学部情報工学科の学年進行に伴い、次の2講座が同学科に新設された。

○プログラム工学

○計算機システム

教官寄贈図書紹介 (その6)

〔寄贈者名〕 〔寄贈図書名〕

谷口 修 (名誉教授) : 改訂振動工学, 改著機械力学
I (機構と運動), 同II (つりあいと振動),
第2次改著機械工学大要, 大学演習機械力学,
機械計測, 機械振動論改訂版
西巻正郎 (名誉教授) : 電磁気学, 音響再生工学
白井英治 (教授) : 切削・研削加工学 (切削加工) 上,
同 (切削加工) 下
大瀧仁志 (教授) : 錯形成反応
岡田利弘 (教授) : 物理学原論 (上巻), 同 (下巻)
谷口汎邦 (助教授) : 教育施設・環境の計画 (教育工
学講座7)
早川一也 (助教授) : 大気汚染 (基礎と例題), 地域
冷暖房計画
白樫高洋 (助教授) : 加工の力学

名誉教授懇談会開催さる

桜の咲きほこる去る4月9日(水)新職員食堂において、恒例の名誉教授懇談会が開催された。

午前11時から、学長はじめ名誉教授45名の列席のもとに、部局長、評議員及び関係者を交えて開かれ、新しく名誉教授になられた4名の先生方の紹介、大学の近況報告等が和やかな雰囲気のもとに行われた。引続いて会食をはさみながら歓談のひとつきを過ぎ、この後、定年退職時に所属されていた学科・研究所ごとに別れて研究室懇談会が開かれ、盛会のうちに散会した。

研究室懇談会は、現職教官との懇親を深める目的で昨年から開催されているものであるが、当日は予定時間を過ぎたところもあり、大変好評のようであった。

なお、名誉教授数は、昭和50年4月現在で89名である。

ベトナム・カンボジア留学生の

指導教官・助言教官懇談会開催

5月13日(火)午後最近の国際情勢の急変に即応するため、ベトナムおよびカンボジアの留学生の指導教官、助言教官その他留学生に関係深い教官による懇談会が開かれた。まず、教務部長から概要につき報告があった。本学ではベトナム留学生55名、カンボジア留学生3名が在学しているが、このうちの48名はいわゆる私費留学生で(全員ベトナム留学生で、この中には

ベトナム国費留学生4名を含む)一般民間の奨学生7名を除き、本国からの送金が止まり生活に困難を来している状況、身分上の不安などについての実情等がのべられ、つづいて本学の行ってきた対応措置(授業料免除、入学金免除その他)について説明があった。つづいて各教官からそれぞれアルバイトの斡旋その他についてのいろいろな情報がよせられ、今後の方針についての種々意見が出された。

このような問題が学内で大きくとりあげられる背景には、全学生数に対する留学生数の割合が全国平均の5~6倍(約30%)にも達している事実からも、歴史的に本学では、留学生の教育に対する関心が極めて高いことがあげられよう。

学内情報

すゝかけ地区関係

かねてから本学の悲願であった新構想の夢の一環として浮び上ってきたすゝかけ地区の計画も、本年4月大学院総合理工学研究科の新発足を契機に超現実的問題として、クローズアップしてきた。このため、いろいろな観点から、また、いろいろなレベルでの討議が活発且つ精力的に行われている。

国際交流関係

本年度の国際交流プロジェクトによる本学からの留学生候補者の選考が行われ、文部省への推薦の手続きが行われている。

またUNESCO大学院については、5月16日西独で同じようなコースをもっている大学(カールスルーエ大学)からの来訪者があり、種々討議された。なお、同コースの来年度分の応募については、6月16日に締切られる。

教務課窓口

事務能率向上と環境改善のため、教務課の学部学生入学年度別窓口カウンターが、去る4月上旬、装いを新たにした。

過去十数年間、教務課職員と学生との絆を結び、社会に多くの学生を送り出した多大の歴史を持った窓口は、内部が狭く、又、学生側からみても控室が狭く、不便さが痛感され、かねてから改造が望まれていた。

教務課職員及び学生にとって、重要な接触の場である窓口カウンターが、装いを新たにすることは、教職員、学生にとって、まさに朗報というべきであろう。



理学部長に

田中郁三教授 就任

岡田利弘前理学部長の任期満了に伴い、後任として田中郁三教授（理学部化学科化学第六）が選出され、4月1日付けで理学部長に任命された。

田中教授は大正15年生まれ、東京大学化学科卒、本学特別研究生、同助教授を経て昭和33年教授に昇任以来、現在に至っている。

叙 勲

本学元事務局長 原 敏夫氏は、4月29日、春の叙勲者として勲三等旭日中綬章を受章された。

学 位（博 士）授 与 者

〔課程修了によるもの〕

工学博士

脇田三郎：工博第467号（49.12.18）

窒素を含むC γ -高Ni 耐熱鋼の組織学的研究——侵入型合金元素を含有する多元合金系の組織変化に関する平衡論と速度論の適用——

井上 誠：工博第468号（49.12.18）

研削機構の確率論的研究

藍澤 宏：工博第469号（49.12.18）

農村集落における生活圏設定の指標に関する研究——生活圏の構成設定とそれに適合した施設設置計画——

若山 滋：工博第470号（49.12.18）

壁式プレキャスト鉄筋コンクリート造建築における部材の生産労務量に関する研究

（博士課程修了による学位授与についての申し合わせ）
B 項適用

村上 雄：工博第471号（49.12.18）

面心立方晶金属の圧延および再結晶集合組織に関する研究

〔論文提出によるもの〕

理学博士

鯉坂勝美：理第113号（50.1.16）

Basic Studies on Lanthanide Shift Reagents in NMR Method

森 雅夫：理第114号（50.2.24）

Queueing Processes with general type-distribution

倉沢 孝：理第115号（50.3.20）

◇訃 報

工学部経理掛事務官 江口善雄氏（33才）は、去る4月1日（火）急逝されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。



同氏は、民間会社を経て、昭和39年8月本学理工学部（現、工学部）化学工学系事務室に勤務以来、工学部の事務に専念され、工学部経理掛に在職中でありました。

附属図書館整理課総務掛事務官 品田 邑子 さん（27才）は、かねて病氣療養中のところ去る3月12日（水）逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。



品田さんは、昭和44年4月本学附属図書館目録掛に勤務以来、図書関係一筋に精勤され、昭和48年6月から同整理課総務掛に在職しておられましたが、昭和49年4月から病氣療養のため休職中でした。

Theory of Nonlinear Interaction of waves in a Plasma Without an External Magnetic Field

渡辺正晴：工第116号(50.3.20)

高濃度拡散による転位の発生と無転位拡散

工学博士

弘津禎彦：工第459号(49.10.23)

マルテンサイト炭素鋼の時効析出に関する電子線結晶学的研究

自念栄一：工第460号(49.10.23)

ガラス繊維強化6ナイロンの力学的挙動

市川 誠：工第461号(50.1.16)

ねじおよび平歯車精度の自動記録式測定に関する研究

奥山 滋：工第462号(50.1.16)

印刷プロセスにおけるパターン変換に関する研究

金井久雄：工第463号(50.1.16)

スイッチング回路の設計に関する電力理論とそのデジタル集積回路への応用

鋪 春男：工第464号(50.1.16)

マイクロ波超多重通信用可変等化器の設計に関する研究

岡部達郎：工第465号(50.1.16)

軟弱な地盤沈下地帯における自動化ヤードの建設に関する研究

佐藤亘宏：工第466号(50.1.16)

鋼構造接合部における鋼板の支圧強さに関する研究

太田 充：工第467号(50.1.16)

D T 核融合炉心プラズマの熱的不安定性とその制御

古島昭雄：工第468号(50.2.24)

油剤付着繊維の摩擦に関する基礎的研究

佐藤一省：工第469号(50.2.24)

粒子追跡法による混合現象の工学的研究

須藤浩三：工第470号(50.2.24)

垂直磁場における液体金属の管内流動に関する研究

木下源一郎：工第471号(50.2.24)

認識への応用を主目的とした触覚の工学的研究

菅野道夫：工第472号(50.2.24)

Theory of Fuzzy Integral and Its Applications

前田 稔：工第473号(50.2.24)

準ミリ波帯パラメトリック増幅器に関する研究

藤代正敏：工第474号(50.2.24)

^{60}Co の B^- 崩壊に伴う微弱 γ 線 (2158 keV 及び 2505 keV) の強度に関する実験的研究

宮崎秀甫：工第475号(50.2.24)

高強度米水セッコウの製造に関する基礎的

研究

鈴木郁男：工第476号(50.2.24)

メタルボンド砥石に関する研究

松田 孝：工第477号(50.2.24)

固体運動と直線往復運動の可逆変換用歯車装置に関する研究

隈部建治：工第478号(50.2.24)

ガリウムヒ素単結晶を用いた固体進行波増幅器の研究

塩崎英樹：工第479号(50.3.20)

絹繊維とエポキシ化合物の反応とその応用

高谷晴生：工第480号(50.3.20)

固体酸触媒を用いる高圧液相下での m-キ シレン異性化、不均化反応

二神浩三：工第481号(50.3.20)

直円管内強制自然複合対流熱伝達の研究

武富大児：工第482号(50.3.20)

低雑音反射形増幅器の広帯域化に関する研究

岩井文彦：工第483号(50.3.20)

ミリ波中継装置用ミリ波・マイクロ波回路系の開発に関する研究

殿岡康彦：工第484号(50.3.20)

化学装置内の混合現象における分散係数の工学的研究

大学院 (修士課程)

生 命 化 学
エネルギー科学
システム科学

専攻入学試験
合格者発表される

昭和50年度から新設された大学院修士課程3専攻(生命化学専攻, エネルギー科学専攻, システム科学専攻)の入学試験が, 去る4月7日(月)~9日(水)及び12日(土)の4日間に亘って行われ, その結果, 合格者30名が4月16日(水)午後発表された。

上記3専攻の応募受け付けは, 4月1日(火)~4日(金)までの4日間に亘って行われ, 募集人員74名に対し, 165名(2.2倍)の応募者があった。

この3専攻は, 昭和47・48年度及び昭和49年度に設置されている7専攻(昭和47年度: 物理情報工学専攻, 昭和48年度: 電子化学専攻, 社会開発工学専攻, 精密機械システム専攻 昭和49年度: 材料科学専攻, 電子システム専攻, 化学環境工学専攻)とともに, 昭和50年4月から独立し, 学際的な専攻内容を持つ総合理工学研究科として, 10専攻でスタートした。

新設の総合理工学研究科は, 既設の, 学部学科に対応している理工学研究科と異なり, 科学技術の急速な発展に備えるため, 各専攻のみの専門分野探究にとど

まらず、関連分野における成果を多面的に導入し、幅広い知識を吸収して、新しい専門分野を開拓する大学院独自の専攻であるといえよう。そのため志望する学生の出身学科は、きわめて多岐に亘り、新分野開拓に対する熱意が伺われる。

なお、16日に発表された合格者数は次のとおりである。

研究科名	専攻名	募集人員	志願者数	合格者数
総合理工学 研究科	生命化学	約30名	40名	8名
	エネルギー科学	約20名	50名	11名
	システム科学	約24名	75名	11名

高津寮の取りこわし行われる

如月寮、つばめ寮も老朽化はひどいが、特に高津寮は昭和15年に建築されたもので30余年を経過し、老朽化が著しく、このまゝ学寮として使用を続けることは危険なので、昭和47年4月以降高津寮への転寮を禁止してきた。転寮禁止後3年を経た本年3月27日、高津寮から最後の1名の寮生が卒業のため退寮し、高津寮の在寮生数はゼロとなったので、直ちに用途廃止の承認をとり3月31日取りこわしを行った。

なお、学寮の今後については、「学寮検討特別委員会」で、管理運営の問題、高津寮跡地の利用等を含め、学寮全体の将来計画を、鋭意検討中である。

昭和50年度

工学部附属工業高等学校専攻科の入試状況

専攻科は、去る3月17日～19日に面接試験が行われ、同26日合格者を発表したが定員を下回ったため第二次募集を行うこととなり、4月10日第二次面接試験を実施、翌日合格者を発表した。志願者、入学手続者の数は、次のとおりである。

科別	第一次募集		第二次募集		計	
	志願者	手続者	志願者	手続者	志願者	手続者
機械科	28	26	18①	11①	46①	31①
電気科	43	27	17	10	60	37
建築科	72①	32	40①	8①	112②	40①
工業化学科	22③	15②	2	2	24③	17②
計	165④	94②	77②	31②	242⑤	125④

○印は、女子を内数で示す。

又、本科（高校）は、去る4月7日（月）入学式が行われた、この結果本年度の在籍生徒数は、次のとおりである。

学科	学年	1年	2年	3年	計
機械科		32	30	29	91
電気科		30	33	26	89
電子科		31	30	26	87
工業化学科		32②	24④	20①	76⑦
建築科		33②	31	24①	88③
計		158④	148④	125②	431⑩

○印は、女子を内数で示す。

新型質量分析計の稼動開始さる

新規に学内共通研究設備として二重集束型質量分析計（日立RMU-7M）が、本館地階35号室に設置され、今月から稼動を初めました。これは、気体、液体、固体と何でも分析することが出来る上、専用のデータ処理装置もついており、本学の研究活動に役立つものと期待されるので、ご利用ください。

公称分解能 M/ΔM 27,000 (10%谷)

質量範囲 M/e 1～最高 4,000

最少試料量 気体0.1ccNTP 液体・固体0.1mg
直接導入0.1μg

特別仕様 ガラス製加熱炉付気体試料導入装置

分析料金 低分解能分析 1,000円

高分解能分析 1,200円

直接導入による場合 300円加算

担当者 桜井晴好技官（内線電話2038番）

編集後記

◇ 「東京工業大学百年史」編纂の資料蒐集を行っている百年史編集委員会では、本学名誉教授を囲んで座談会を行っています。クロニクルでは、その座談会の内容を集録し、掲載することとしました。本号ではまず、本学の大学昇格当時の記事を掲載いたしました。

◇ 新入生セミナー、学科所属決定等新学期のあわただしさも一段落し、やっと前学期の授業も軌道にのって来たことと思います。クロニクルでは、今後学生関係の記事資料を積極的に載せて行きたいと考えています。

東京工大クロニクル No.70

昭和50年5月31日

東京工業大学広報委員会 発行

東京都目黒区大岡山2-12-1

Tel. (726) 1111 内線 2032